

し、米、大豆、材木など多し、かやうのものを、是より京都の方へ人馬にてはこび、近江の貝津へ出し、貝津より舟に積て、大津のかたへつかはす、又京都より諸の賣物を大津へ出し、大津より船にのせて貝津へつかはし、貝津より爰にくだすゆへ、往來の人馬甚多してやむことなし、凡諸國より爰に舟の來る事、三月の末より四五月の間多く來る、又北國は寒きゆへ茶なし、畿内、近江、美濃、尾張より茶を多く持來て此地にてうり、北の諸國へつかはす、我國へ歸る時はあきなひもの多く買て行、茶町有て大なる商家多く、其町長し、茶の間屋多し、此入海東西の横二里ばかりにみゆる、引田よりながる、川有て、其川に舟入る、町の東に氣比の大明神有、これ仲哀天皇の御廟なり、

略○下

〔敦賀志稿〕此郡は上つ御代には氣比浦といひしを、吾大神譽、田別皇太子と大御名かへまし、おほん時よりぞ、世の人皆つのがとはいひならしけむ、ところのさま群山たちへだて、いさ、かも他境をまじへず、東は南條郡に隣り、東南は近江國伊香、淺井の兩郡となり、西は若狹三方郡にとなり、北は海をいだきて、蝦夷まかつにつゞきたる大洋也、略○中入海の間、東西のわたり或は一里或は二里、南北五里餘有、山海の眺望さながら、晝にもかよひていとおもしろく、目とゞまる處ぞ多かる、此處より松前に至る船路三百餘里が間には、越後國の新潟と、此敦賀と只二所ぞすぐれてよき湊也といふ、濱は白砂にていと奇麗に、海は底ふかくて、大さのかぎりといふ船もいそぎはちかくよせ來ていかりおろす也、かゝる處外にはなしといふ、さればにや常に出入舟多くして、いと賑はへり、略○下

〔諸國湊附〕越前

一敦賀津湊、口之廣サ拾五町、深サ四丈計、はへなし、西請間之、内迄けニ不構、大船何程も掛る、沖の懸り場、丹後浦入より是迄酉申の風真艦